
十三番目の秘術

秋乃 夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十三番目の秘術

【Nコード】

N4427BA

【作者名】

秋乃 夜

【あらすじ】

戦国時代と見せかけて始まる中世ファンタジー。

イロハは西方から伝わった<天葬>という葬儀に疑問を持ち、大陸東方に作られたヤマト街を出て、神学校に入学する。天葬について調べながら三学年になったある日、イロハは友人から不穏な噂を聞く。神学校内の人間が消失するという事件が国外で起きているらしい、と。その日の午後の講義でイロハは意識を失う。目覚めて目にした光景は。

燃え少し。萌えなし。異世界転生でも主人公最強でもMMOでもな

いので需要はないかと思いますが、生温かい目でご覧いただければ幸いです。

紅葉の中で（前書き）

はじめまして。よろしくお願いします。

元旦から投稿を始めようと思っていたのにどうしてこうなった……。

紅葉の中で

紅葉の朱に包まれた境内に、乾いた音が響いていた。

十に満たないだろう少年と少女が木刀を手に打ち合っている。

剣の技量では少女が少年を寄せつけず、力や速さでは少年が少女を圧倒して、結果は互角。

だが、先に息が切れて相手についていけなくなるのは、決まって少女の方だった。

「じゃ、今日は終わりっ」

少年がそう宣言して、切っ先を下げた。

少女としては物足りないが、求めても付き合ってくれないのはわかっていたので彼の言葉に従う。

胴衣の袖で汗を拭う少女の左目の下には傷があった。

ムキになって少年に突っかかっていった結果だが、少年の剣によるものではない。

弱った握力で打ち込んだせいで、剣を弾き飛ばされてしまったのだ。

それが顔にぶつかって、目立つ傷をこしらえる結果になった。

剣を修める家に生まれた少女としては、それくらいの傷は勲章のようなもの。

気にしたのは少年の方だった。

慌てふためいて謝り倒し、責任を取るとまで言い出した。

そしてそれ以来、少女が疲れを見せると相手をしなくなったのだ。

「イモあるんだ。焼こうぜっ」

少年は箒を手に、石畳や砂利の上の落ち葉を集め始める。

疲れ知らずの少年を横目に、少女は溜め息をこぼした。

——不条理だ。

年齢は同じで体格もそう違わない。

それなのに、性差で片付けられないほど大きい身体能力の差が二人にはある。

その上、稽古を繰り返すうちに少年の剣の腕前も目に見えて上達している。

そう遠くない先、太刀打ちできなくなる予感があった。

「……おい、聞いてるか？ 火打ち石もってきてくればーっ」

「はいはい」

剣を鈍らせるような思考を振り切って、小走りにお勝手へ向かった。

少年が慣れた手つきで火をつけ、枯れ葉から煙が上る。

狼煙のようだ。

「なんか、尾張の国が強いらしいな……」

煙を見上げながら少年が言う。

どうやら、考えることは同じだったらしい。

「いずれ、攻めてくるかもね……この薩摩の国にも」

極東にある大和の国は、戦乱のまっただ中にある。

だが、大和が一つの形に統一されて戦乱が終結したのは――それからわずか一年後のことだった。

天葬

黒い僧衣を身に纏った司祭とその見習い四人が一軒の民家を訪れていた。

「ようこそおいでになりました。司祭様」

一団は家の住人から歓待を受けた。

心から喜ばれ、望まれ、彼らの家に迎え入れられた。

だが、司祭たちが足を踏み入れたその家は大きな哀しみで満たされている。

司祭は静かに溜息をつく、なるべく感情を殺して口を開く。

「して、天葬を所望されたのは――」

「こちらです」

家主らしき壮年の男が司祭たちを先導した。

案内されたのは、いっそう深い哀の感情に沈んだ寝室だった。

「母――キャサリン・テイラーです」

ベッドに横たわる老婦人の姿を確認すると、司祭はその息子たちに視線を移す。

「別れは済まされたか」

「……はい。しかと」

頷く家族は一樣に涙を溜めている。

「では、キャサリン・テイラーその人を天へと送ろう」

「――ご家族の方はお下がりにください」

見習いたちは老婦人の子息や孫を下がらせると、自分たちもより離れた場所に控えた。

司祭はベッドの前で片膝をつき、老婦人に両手をかざした。そして、彼の口が呪いの言葉を厳かに紡いでいく――。

「お祖母さま……」

瞳に涙を溜める家族が見守る中、老婦人の体は光の粒に変わり、虚空へと溶けていった。

司祭は立ち上がると、ベッドの上に残された衣服に背を向ける。

「キャサリン・テイラーを天の御許へ送りました」

「ありがとうございます。ありがとうございます」

「司祭様と、母を迎えて下さった神に感謝を――」

穏やかに微笑む司祭に、故人の家族は謝意を口にし、敬意の眼差しを注ぐ。

天葬の場において、神の代理人とも呼べる司祭は畏敬の対象だ。神の奇跡を垣間見た故人の家族はもちろんのこと、司祭の見習いたちにとっても同様に。

ただ――この場には一人だけ例外がいた。

四人いる見習いの中の一人。

その一人だけは、周囲とはまるで異なる視線を司祭に向けていた。

探るような、疑念の視線を。

「ねえ、おばあちゃんは、てんごくにいったの？」

「そうだよ。おばあちゃんはね、これからは天国でおまえのことを見守っていてくれるんだ」

「いつか、ぼくがしんだら……おばあちゃんにあえる？」

「天国にいけたら会えるよ。だから、ちゃんといい子にしてなくちゃね」

キャサリン・テイラーの孫らしき幼子に、その両親が優しく諭している――。

神学校と日課

小鳥が囀る早朝――。

神学校の敷地を彩る青いアジサイに、一人の青年が水をやっていった。

黒髪黒瞳という異国の容貌以外にさして特徴はない。

ただ、二十代後半という年齢にしては覇気がなく、目元の隈が目立っている。

それは過去の労苦を示しているようでもあり、ただの寝不足であるようにも見えた。

青年――イロハ・イチジヨウにとって、水やりは朝の日課だ。

イロハが籍を置くのは、博愛の神とその精神を敬い、尊び、学ぶ、神学校。

そのため、学生には何らかの奉仕活動が義務づけられている。

学校や寮、あるいは近隣地域の清掃活動を選ぶ学徒が多いが、イロハのように水やりでも構わないし剪定などでも問題ない。

とにかく自主的かつ継続的に行動することが求められているのだ。

「……今日あたり降ってくれないかね」

イロハが見上げる空は、真っ青だった。

西を眺めても雲はない。

青い花と緑の葉に水を投げかける。

アジサイたちはイロハ当人と同じく、今ひとつ水気に乏しかった。

アジサイが花を咲かせるこの時期——ヤマトの梅雨ほどではないが——ロンバルディア王国には雨が多い。

雲一つない快晴から急に天気が崩れることがまある。

とはいえ、一週間雨が途切れることもまた珍しくなく、現に今日で六日間雨がなかった。

わりと丈夫な植物とはいえ、少々きつい環境だ。

水やりを絶やせないイロハにとっても辛い。

降雨がない分、水量は大雑把でも構わないのがせめてもの救いだろうか。

イロハは敷地に流れる水路から水を補充して作業を続けながら、神学校を象徴する教会堂の前へやってきた。

教会堂の重厚な扉はまだ閉ざされている。

収容人数は神学校の学生数とほぼ等しい四百名ほど。

高さが二十メートルを超える屋根には尖塔が三本、山の字を連想させる形と高さで並んでいる。

大小様々な窓はステンドグラスで装飾されていて、外から見ると何の変哲もないが内部には美しく荘厳な光の絵画を演出しているはずだ。

イロハはこの教会堂が苦手だった。

理由はよくわからない。

ここの主である司祭への感情とは関係なく、あまりいい気分にならないのだ。

本能的な忌避感がある。

それはもしかしたら、教会堂の前に広がる広場を囲うように植えられたアジサイのせいかもしれない。

赤いのだ。

神学校内で咲く他のアジサイはどれも青いの、このアジサイだけ赤い。

イロハは別に赤が嫌いなのではない。

アジサイは青系統の方が雨に映えると思うが、赤系だって悪くはない。

イロハが生まれたヤマトの秋にも赤が多いし、むしろ赤は好きな色だ。

だが、このアジサイの赤はよくない。

どこか病的で、禍々しい気がして――

「おっはよーさん」

イロハは挨拶が聞こえた方へ顔を向けた。

イロハが来たのとは反対方向から、神学校の黒い制服を着た二十歳前後の女学生がやってくる。

「ああ……おはよう」

「今日も眠そうだねえ、イロハくんは」

そう言って、同じく水やりを奉仕活動に選んでいるフランシーヌ・レクレールは微笑んだ。

金の髪に青い瞳は珍しくないが、イロハと同じく数少ない異国の出身者だ。

それ故にイロハとは気安い仲だった。

「そんな夜遅くまでなにしてるか興味あるなあ」

「……勉強だよ」

「ウソばかりー。それで授業中に居眠りじゃ、本末転倒だもん」

神学校は司祭などの神職を目指す者たちが集う教育機関だ。

宗教由来で国に属さないため、身分・国籍は不問。

イロハやフランシーヌのような異国人も教義的には差別されることはない。

また、年齢も十代後半から四十代までと、神職を目指す者たちに広く門戸を開いているのがうかがえる。

反面、生死を司る職を目指す以上、在学時に課せられる試験は厳しく、卒業できるのは入学時の半数以下と言われている。

「でもさ、わたしらの学年ってまだ誰も落第してないよね？」

「これからは厳しくなるんじゃないか？」

イロハたちは第三学年だが、一、二年時は基礎的な講義ばかりだった。

天葬の付き添いも第三学年からだ。

「第一号にならないでね、イロハ」

「フランの方が成績悪くなかったか」

「ぐ……今に見てなさいよ。首席で卒業してやるんだから」

二人は赤いアジサイに水をやり、校舎へ歩いていく。

夢

桜の花弁が舞う中、少年は走っていた。

何かから逃れるように。

何かを求めるように。

少年が目指しているのは、幼馴染みがいる神社だった。

「――……かえでっ」

少年は幼馴染みの名を呼びながら階段を駆け上がった。

彼女が住む家の戸を叩く。

反応はない。

焦燥に駆られ、何度も戸を叩き、何度も声を上げた。

けれど――幼馴染みの少女もその家族も、誰も出てこない。

隣の家と同じだった。

やはり消えてしまったのだ。

少年の家族のように――。

「そ、そんな……ことって……」

少年は恐る恐る、叩いていた戸に手をかける。

隣家のときは中に入るようなことはしなかった。

だが、ここは大事な幼馴染みの家。
彼女たちの安否を確認せずにはいられなかった。

「かえで……？」

少年は恐る恐る足を踏み入れる。

室内はたいして暗くないのに、真っ暗闇の中にいるような錯覚に囚われる。

足が震え、進路が定まらない。

それでも、恐怖を噛み殺して家中を探して回った。
請うように願うように、少女の名を呼びながら。

しかし、当たってほしくない予感当たってしまう。

幼馴染みの少女もその両親も、いなかった。見つからなかった。

少年は少女の家を飛び出した。

一縷の望みにかけ、少女がよく一人で稽古をしている神社の裏手へ走る。

砂利を踏み散らすたび、胸の中から何かがこぼれていくようだった。

結局、そこにも少女の姿はなかった。

少年は桜の花びらがまばらに散っている地面に膝をつく。

「父さん、母さん……かえで……みんなどこいったんだよ……」

農作業をしていた父親は、少年の目の前で光になって消えた。

着ていた服を、足下に残して。

少年は慌てて家に戻ったが、母も祖母もいなかった。

ただ軒先と台所に、二人が着ていたはずの服が投げ出されていて――。

誰もいない家で一晚を過ごし、家族も幼馴染みも戻ってこないことを悟って、少年は町に出た。

人の姿を探して。

それから一年以上もの間、少年は人と出会うことはなかった。

魔女の噂

「……きて。起きてってば」

「あー……」

机に突っ伏していたイロハは背中を叩かれ目を開けた。

「おはよ。お昼食べに行こうよ」

傍らに立つフランシーヌに胡乱な目を向けた後、イロハは頭を振った。

「……くそ、なんで今ごろ」

「どしたの。ちよっと顔色悪いよ?」

「嫌な夢見た」

背もたれに体重をかけ、天井を見上げる。
最悪な気分だった。

神学生たちが退席していく中、フランシーヌがイロハの隣に座る。

「どんな夢だったの?」

「夢というか、昔の……記憶だな」

「あー……ヤマト出身だもんね、イロハは」

およそ二十年前——ヤマトという国は、なくなった。

西方の国に取り込まれたというわけではない。
文字通りの意味で、なくなったのだ。

住んでいた人間がすべて消失した、という形で――。

その詳細は西方にはほとんど伝わっていない。

それが起きたのが知名度の低い極東の国だったせいもあるだろうし、その出来事そのものが忌避されているせいでもあるだろう。

西方では誰もその話題に触れたがらない。

国も個人もヤマトで何が起きたのかを知ろうとしないのだ。

無人となった土地に入ろうとする者も皆無だった。

盗みを生業とする人間さえも、廃墟と化したヤマトには立ち入らない。

そして現在、西方の国々ではヤマトという国が存在したことをすら忘れられている。

「あれでしょ、国に帰ったらみんないなくなってた、って……」

「ああ……」

生き残ったのは諸外国との外交や交易に携わり、国外にいた人間だけだ。

世界全体で数えても、ヤマトの生き残りは三桁止まりだろう。

イロハもその中の一人、ということになっている。

「――あ、いなくなったで思い出した。気になる噂があるんだよね」
「噂？ ヤマトの？」

「違う違う、神学校のこと。知らない？」

「さあ。どんな噂だ？」

「神学校の学生が消されてる、ってやつなんだけど」

「――それ、詳しく教えてくれ、フラン」

イロハは机に手をつき、フランシーヌに勢いよく顔を近づける。

「うわ、食いついた」

「いいから」

「んー、食堂でって言いたいところだけど……ま、いいか」

イロハの顔を押しやりながら、フランシーヌは話し始める。

「えーとね……神学校の生徒がね、服を残して消えちゃってるらしいの」

「それは、この神学校の話……じゃ、ないよな」

「それどころか国外の話だよ。姉さんからの手紙に書いてあったんだから」

フランシーヌの姉はロワール王国にいる。

今でこそ手紙のやりとりをしているが、フランシーヌが異国の神学校に通っているのは姉との確執が原因だとイロハは聞いていた。

なにやら、司祭を目指すのを頑なに反対されたらしい。

理由を聞いてもはぐらかされるばかりで答えてもらえず、結局フランシーヌが家を飛び出す形になった、と。

フランシーヌが神学校に入学してからは、もう仕方ないというところで関係はそれなりに修復されたようだ。

「消えたのも一人二人じゃなくて、神学校ごとなんだって」

「――学校ごと？」

「そ。学生も教師も司祭様もまとめて……何百人もいっぺんに」

規模の大きさに、イロハはさらに興味を引かれる。

「一校だけじゃなくて、何校も。だから噂になってるみたいで……」

「特に騒ぎになってない理由もそれか……」

「たぶんね。本当に起きたことだって思われてないんだよ。わたしも信じられないし……イロハの感想は？」

「あるのか、って……感じだな」

「……ある？」

「俺が知る限り――……」

思わず本音を出しかけ、イロハは口ごもった。

「ん？ なに？」

「いや……。それって、神学校が狙われてるみたいな話だと思うか？」

「どうだろね。でも、本当だとしたらそうなるんじゃないかな。犯人は魔女だって言われてるらしいし――」

数百人単位での失踪――消失。

自然現象なら神学校にばかり当たるのは不自然だ。
だとすれば、それを引き起こした存在がいる。

そして――規模は段違いだがヤマトで起きた人間消失もまた、誰かがやったということになる。

「魔女か……会ってみたいな」

「ちよつと……やめなよ？　噂がほんとだったら消されちゃうってことじゃない」

「神学生だって知らなかったらいい。それに、目があっただけで消されるなんてことはないはずだ。神学校の敷地外で会えれば……もっと詳しい話、姉さんに聞けないか？」

「まったくもう……意外と向こう見ずなんだから」

フランシーヌは呆れたように溜息をつき、席を立った。

「その話は後、お昼ごはんが先！」

消失

その日の午後の講義はいつものように始まり——いつものようには終わらなかった。

イロハは教室を見回し、愕然としていた。

教室に人が、いなかった。

肉体が存在しないのだ。

各人の席には、服だけが残されている——。

「これ、は——」

頭を殴りつけられたかのような衝撃が閃光を連れてくる。

眩い白光の中を二十年前の記憶が流れていく。

イロハは知っている。これを知っている。

この世界を。

人が消えてしまったこの世界を——。

「本当に……？」

自分以外の学生が服を脱いで置いていった、という考えが浮かぶもイロハは却下した。

消えた学生が着ていた服はほとんどがイスや机の上に残されているが、床に落ちてしまっている服もある。

そもそも男女混合の数十人が揃って服を脱ぐ事態など思いつかないし、机の上の様子も講義の最中だったことを示している。

イロハは隣の席の服に触れてみた。

まだ体温が残っていた。

「時間はそれほどたっていないのか……？」

二十年前と大きく違うことがひとつあった。

その瞬間に、人が消えていったはずのそのときに、イロハは意識がなかったことだ。

二十年前は、父が目の前で消えるところを見た。
今回は見ていない。

「寝ては、いなかったはず……」

食事後の講義はいつも以上にイロハの耳に入らなかった。

眠たかったわけではなく、焦燥に駆られていたためだ。

昼食時、フランシーヌに姉からの手紙を見せてもらう約束をして、今日中に返事を書いてもらうことにもなった。

だが、それくらいの行動では物足りない。

何が起きたのか知りたいのなら、噂の出所となっている場所へ――それが国外でも――出向いて調べるべきではないのか。

そんな考えがイロハの思考を占領していたのだ。

しかし、そんな悶々とした時間はそれほど長くは続かなかった。

イロハの意識が唐突に、焼き切れるようにして途切れたからだ。

重い何かが全身にのしかかってきたような。

同時に体が内側から弾けたような。

そんな破壊的な感覚と共に。

覚醒もまた突然だった。

寝ぼけることもなく、イロハははっきりと目を覚ました。

自分が机に突っ伏していたことか疑問に思ったほどだ。

そして、顔を上げ上半身を起こし——この光景に出会ったのだ。

「……！ フランは——」

イロハは立ち上がり、教室の後方にある彼女の席を見た。

唯一この教室内で友人と呼べる彼女もまた、消失していた。

虚脱感に襲われ、尻がイスに落ちる。

「また、俺だけ……」

それは結局、誰にもわからなかったことだ。

なぜ、ヤマト国内にいてイロハだけが生き残ったのか――。

イロハは過去の再現に震え、うなだれる。

だが、気落ちしている暇などない。

それは許されない。

胸の奥、心の深いところで叫び声が上がる。

立て、と。

己の生存に罪悪感を覚え、それを嘆くのは傲慢だ。
生きているのならば、すべきことがある。

「――そうだ。何のために生きてきたのか思い出せ」

起きた事象は二十年前と同じだ。

だが、イロハは二十年前とは違う。

同じであってはならない。

机を殴りつけ、哀しみや喪失感を置きざりにする。

「知るためだ、あのときヤマトで何が起きたのかを。そして――」

こんなことを許してはおけない、許してはならないと思うのなら
ば――。

「やったのは魔女か、それとも……」

イロハは恐ろしいほど静かな校内を駆けていく。

司祭の素顔

あごひげをたくわえた中年の男が学生に神の言葉を読み聞かせていた。

ヘンリー・バーネットーロンバルディア第五教区に三人いる司祭の一人である。

教会に派遣された他の二人と違い、彼が派遣されたのはロンバルディア第五教区の神学校。

ヘンリーにとってそれは幸運であった。

肉親の死を控えた家を訪れて行う天葬も、読みたくもない宗教文書の朗読を繰り返すのも面倒この上ない。

だが、義務はそれだけである。

気に入らないなら排除しろ、殺してしまえ。

それで済むはずの信徒の下らない悩みに耳を貸す必要がないし、偽善的な一言を与える必要もないのだ。

それに、この仕事は面倒ではあるがつまらないわけではなかった。

天葬では畏怖の視線に囲まれ、神になったような気分を味わうことができる。

まだ何も知らないく愚者たちが、神の子が起こした奇跡の話を真剣に聞いている姿は滑稽で優越感を覚える。

与太を信じていると馬鹿にしているわけではない、奇跡の逸話が本当にあったことは間違いないのだから。

ただ、数々の奇跡を起こした本人が決して、博愛と自己犠牲を実践した聖人などではなかったというだけの話である。

彼らの無垢な幻想を残酷な現実で叩き壊すことを想像すると心が躍った。

だから、それが実際に行われる真冬の卒業試験は愉悦の極みだ。敬虔な学徒が堕ちていく姿は実に愉快で、彼らが上げる阿鼻叫喚は賛美歌のようで。

とすれば、天職なのだろう。

司祭にと誘われたときは何を似合わないことをと呆れたものだが――ヘンリーに司祭の役割を振った男は、正確にヘンリーの本質を見抜いていたのだろう。

ヘンリーは学生たちに背を向け、祭壇の奥に建てられた巨大な像を見上げた。

黒いひげに包まれた唇を歪める。

彼らがこれに気づくことになる日が待ち遠しい。

講義を始めるため、ヘンリーは振り返る。

誰もいなかった。

彼の話聞くはずの学生たちが、誰一人として存在しなかった。服だけを残し、跡形もなく消え去っていた。

「これは――……」

ヘンリーは特に動揺することはなく、落ち着いて聖堂内を見渡す。ここの学生たちにはまだ伝わっていないようだが、司祭以上にはこの怪事の情報が流れてきていた。

北西部でわずかに接しているロワールやその隣国のアーレンベルクでのことである。

神学校の敷地にいた人間すべてが消失した、と。

「ならば、ここだけでなく……校内にいた者は全滅ということか。やってくれるな。私の愉しみを奪うとは――」

独りごちていると、教会堂の扉が外から開かれた。

木が軋む音が響き、面積を広げる光の中に人影が浮かび上がる。

「……貴様か。神学校の人間を消しているという魔女は」

白い長衣を靡かせ、聖堂へ入ってくる影。

顔は目深に被った白いフードに覆い隠され、性別も年齢もわからない。

ただその身なりや体型、口元から若い女だろうと読み取れるのみだ。

女は聖堂の中央で歩みを止め、ゆっくりと唇を開く。

「殺してあげるわ、司祭様」

女の声は冷たく透き通っていた。

荘厳な聖堂で賛美歌を歌うにふさわしい声音だ。

言葉は天使のそれではないが、魔女ならばむしろ当然の言い草であるし、ヘンリーの価値観では好ましくさえある。

だが――

「くく……はっ、はーはっはははははーっ!!」

ヘンリーは天へ向けて、堪えきれない哄笑を吐き出した。

嗤い続け、やがて肺の痙攣が治まると、壇上から魔女を見下ろす。

「殺す？ この私を？ 神の御業を授けられたこの私を殺すと？

ふふっ、ふははっ！ 身の程を知れよ、魔女が！」

＜愚者＞であれば、恫喝に気圧され尻餅をついていただろう。

しかし、魔女は不遜にも口元を歪める。

「神――？ そんな連中くそくらえよ」

「愚かな……!!」

本心から、ヘンリーはその言葉を出していた。

何の力も持たぬ偶像でしかない神と彼らを混同するとは笑止。そして無知。

教えてやらねばならない。

「我が神の力、その身で知るがいい！ <インクルード>――」

ヘンリーは神の力をその身に降ろした。

「Nur der tote lost dich vom wilden drange」

破壊のための呪文を紡ぎ、魔術を構築していく。

「Bricht das grollen der erstickenden stimme」

重々しい言霊が響く中、魔女は司祭のいる祭壇を目指し歩を進める。

恐怖の気配など微塵もなく、悠然と淡々と聖堂の木床を踏み鳴らす。

「Kuhlt den brand auf der verletzten wange. . .」

やはり無知。

神の力を使おうとしている者に、その身を無防備に晒すなど愚の骨頂。

だがそれでいい。

天葬のように、死を覚悟し受け入れた者に死を与えても何の面白みもない。

「Ruf e bis er hier voruber schwimme!」

ほどなく、ヘンリーの魔術が完成する。

施設を慮る必要はない。

故に、設定した威力は最大級。狙いは甘く。

「即死はしてくれるな。その美しい声で奏でてみせろ、血の海の中で——絶望の歌を」

ヘンリーが右手を魔女へ向ける。

「『破城の槌』——」

教会へ

イロハが向かっているのは教会堂だった。

そこには司祭がいる。

魔女の居場所が定かでない以上、手がかりは彼だけだ。

司祭が生きているかはわからないが仮に生きている者がいるとすれば、やはりそれも彼だけだろう。

天葬を行う司祭が他の人間と同じように消失するとは、イロハには思えないのだ。

天葬という習慣を知って以来、イロハは常に疑念を抱いていた。

死者を天へ送り届けるというその神の御業——それは、ヤマトに住む人々を消した業ではないのか。

天葬と人の消失現象、この二つは同一ではないのか、と。

天葬は他の葬儀——例えば火葬や土葬や水葬、あるいは獣葬などとは決定的に違う点がひとつある。

天葬以外の葬儀は対象者の死後に行われるが、天葬だけは対象者の生前に行われるのだ。

つまり、生者が対象。

イロハが知る限りでは、死者を対象にした天葬が行われたことはない。

天葬は術前まで対象者が生きていなければ成立しないのだ。

故に疑問が浮かぶ。

対象の人物が死に瀕していない、まったくの健康体であっても天葬は行えるのではないか。

イロハは別に天葬そのものを否定しようと考えているわけではない。

天界の存在の有無はさておくにしても、天葬で苦しんだというような話は聞かない。

楽に逝けていることは間違いないのだ。

天に送られるという言を信じ、本人が望むのであれば、それは殺人ではなく介錯と判断すべきだろう。

東方西方で文化がまったく異なる以上、死生観にも違いがあつて当然だ。

イロハとて、西方では理解されないヤマト文化の名残をいくつも有している。

だからイロハが問題にするのは単純に、天葬に使われている神の御業なるものが殺人に転用可能かどうか、だけだ。

これについて、イロハの中でまだ確たる答えは出していない。

おそらく可能だろうが、見聞きできていないのだ。

第三学年となつてから毎日毎晩——ロンバルディア第五教区の三人の司祭を尾行していたが、殺人という凶行に及んだ者はいなかった。

教区内に目立つ失踪者がいたわけでもない。

あえて言えば、この神学校の司祭ヘンリー・バーネットに疑惑が残るくらいだ。

端的に言ってしまうえば、彼は神職者には見えない。

気ままに酒を飲み肉を食らい、売春婦が並ぶ通りで女を拾う。

そしてイロハにはもうひとつ知りたいことがあった。

神の御業なるものは誰にでも、イロハにでも習得できるものなのかどうか。

イロハが神学校にわざわざ入学した動機そのものだ。
こんなことになってはもう確かめられそうにないが。

校舎を出たイロハは、教会堂の前——赤いアジサイに囲まれた広場へと辿り着く。

晴れているはずなのに、周囲はどこか暗い。

教会堂にだけ雲がかかっているようだ。

そのせいで赤いアジサイが一層不吉に映る。

それでもイロハは足を踏み出した。

開いた教会堂の扉へ向けて——しかし、すぐにその足が止まる。

「——声……？」

空耳ではない。扉の向こうから微かながらはつきりと声が聞こえてくる。

それもふたつ。男と女。

司祭と魔女、だろうか。

イロハは唾を飲み、足音を殺してアジサイの傍まで移動した。

急く心を諫めながら中を覗ける位置、扉の脇を指して忍び寄っていく。

イロハが教会堂との距離を半分まで詰めたとき――

「即死はしてくれるな……」

不穏な司祭の声に、全身の肌がざわついた。

次の瞬間、教会堂から白光が溢れた。

魔女と神父

「ば、馬鹿な……」

呆然と眩き、ヘンリーは一步後退した。

編んだ魔術は発動し、狙い違わず魔女を直撃したはずである。

それを示すように標的の後方——聖堂の入り口には魔術の爪痕が残されている。

戦争時の籠城に向いた分厚い扉は跡形もなく、頑丈な石壁も吹き飛んで巨人さえ通れそうな大穴が空いている。

にも関わらず、それを成した破壊的な力を身に浴びたはずの魔女は——無傷であった。

白いローブこそ失われているが、露わになった右半身の白い肌はどこにも損傷は見られない。

右腕に酷い火傷の痕はあるが、それは今できたものではないだろう。

「おしまいかな？」

魔女が小馬鹿にしたように唇の端を持ち上げた。

「ふ——ふざけるなッ！ Bedecked in
Himmel, Zeus, Mit Wolken und
St!»

司祭は叫び、先程とは異なる魔術の構築を始めた。

「Undube, Knaben gleich, Der Dis
teIn kopft,」

それを聞いて、魔女はやはり無防備に裸となった足を踏み出す。

調子に乗りおって——恐れを知らない魔女の態度に頭の血が沸騰する。

魔女が生きているのは、先の魔術が当たらなかっただけにすぎない。

瀕死の呻きを断末魔の歌を聞くために、狙いを甘くしたせいである。

「An Eichen dich und Bergeshohn!
」

だがもうそのような甘いことはしない。確実に葬る。

「『白雷の檻』——！」

強大な稲妻が轟音を引き連れ、聖堂内にその姿を顕現させた。

走る雷は光の檻となって魔女を包み、その身を撃つ——。

「かはっ！ はっ、あーっははははははは——っ——！」

雷光の渦の中で痙攣し焼け焦げていく魔女の無惨な姿に、ヘンリは高らかに嗤った。

その笑い声を掻き消す雷鳴の中で、光の帯はなおも生まれては猛る。

電撃が生んだ大量の熱は建材の水分を弾けさせ、イスを木片に変えて舞い上がらせた。

魔女が明滅する白光と埃の中へ消えていく。

「ははははっ！ だから言ったであろうが！ 身の程を知れとな！」

魔術の効果が終わっても、ヘンリーは肺が壊れるような高笑いを続けていた。

それが恐怖の裏返しから来る衝動なのだと、気づかぬ振りをして

「ははっ、はっ……！？」

司祭の哄笑が乾く。

舞い落ちる塵を無造作に掻き分ける魔女の姿に。

「ば、馬鹿な……馬鹿な馬鹿な馬鹿なっ！？ そんなはずがあるかっ！？」

ヘンリーの目は確かに、確かに、捉えていた。

魔女が雷に貫かれた姿を。

雷撃と高温の坩堝で人が無事でいられるはずがない。

「くそっ！ い、今一度っ……」

「無駄だ」

何の痛痒もない透明な声がヘンリーの精神に突き刺さる。

「＜魔術師＞では＜月＞を殺せない」

その声はすでに、手を伸ばせば届くような距離で――

もしもヘンリーがもう少し冷静で慎重であれば、容易く気づけたはずである。

魔女は己と同等以上の力を持ち得ている、と。

どうすれば神学校内の人間を全て消せるのか。

その問いを己に投げかけるだけでよかったのだから。

いや、もともと彼はその程度の器だったのだろう。

あるいはいみじくも彼の言葉通り――彼の力は授けられたもの。
本質の理解という点においては未熟極まりないということである。

故にこの結果は必然。

ごとりとヘンリーの足下で何かが音を立てた。

それは、彼の右腕であった。

殺意の先

刀と槍が衝突し、黒い火花が散った。

片や黒髪黒目、異国の容貌を持つ男。

片や凍りついた薄青の瞳と白銀の髪を持つ女。

二人が交情させているのは黒い歓喜と黒い憤怒だ。

演者は逆しまになった舞台を異様な速度で疾走し、黒の軌跡を交差させる。

割り込むところではない。

目で追うことすら困難な剣戟だ。

だが――

このまま圧倒されていていいはずがない。
他人に委ねていいはずがないのだ。

あれは、あいつは――

ようやく知った。見つけた。
逃しはしない。譲りもしない。

だから。

力が欲しい。

あれに迫り、あれを殺す業が欲しい。

それだけを。

それだけをただただ願う。

深く、暗く、黒く——ああだから<それ>はまさに殺意の塊なの
だろう。

そのためにのみ存在し、そのためにのみ使われる。

その業の、秘術の名は——

接触

「い、つつ……」

イロハは赤いアジサイの中から身を起こした。

光が炸裂したかと思った瞬間、吹き飛ばされたのだ。

広場の半ばから端の植え込みまで、十メートル以上もの距離を。

体の節々が痛み、服は裂けているが、外傷はないようだった。

正確には血の痕はあったが——それに気づける余裕などイロハにはなかった。

目的地の惨状に目を奪われていたためだ。

「ど、どうなってるんだ……」

教会堂の入り口が崩壊していた。

大砲が撃ち込まれたかのように、いや、内側から大砲が発射されたかのように——

ただごとではなかった。

呆然と歩き出そうとして、つま先に何かがぶつかった。

薪ほどになった教会の扉の残骸だった。

イロハはそれを拾い上げて、震える。

女ひとりでは動かせないような分厚い扉に、一体どういう力を加えればこんなことになるというのだ。

と、

「ぐあああああああああああああつ!？」

男のものと女のものとも判別できない、血を吐くような絶叫が空気を裂いた。

危険を忘れ、イロハは教会堂の中へ飛び込んでいく。

「――」

イロハが足を止めたとき、教会堂内で動いていたのは司祭だけだった。

床を転がる司祭の首だけ――だ。

そして、首無しの体が崩れ落ち、赤い赤い血の花を撒き散らした。

誰かの、足下に。

「……魔、女？」

大穴から流れ込んだ風が、女の体からローブの残骸を払う。

露わになった白い肌に伝い落ちる髪は白銀。

イロハを振り返る瞳は冷たく凍ったアイスブルー。

埃と血が入り交じった匂いの中で、魔女が気怠げに口を開く。

「おい、その下僕。服だ」

下僕

想像を超えた光景に硬直していたイロハは、魔女の声を聞いて目眩を起こしたようにふらついた。

「……………は？」

口から、間拔けな声が漏れていく。

「聞こえなかったのか。お前の服をよこせ」

髪を靡かせ、魔女は肌を隠すことなくイロハに歩み寄っていく。

「ふ、服なら、そのあたりにいくらでもあるだろう……」

「臭くて着れるか」

魔女は周囲を一瞥すると、イロハの提案を却下した。

「早くよこせ」

「く……」

何やってるんだ、俺は――

内心で自分の行動に呆れながら、イロハは上着を脱いだ。

魔女は渡された服を見て、左目の傍にあるほくろを微かに動かす。

「全部よこせ。下もだ」

無表情な上目遣いに詰め寄られ、仕方なく脱いで渡す。
さすがに下着は剥がれなかった。

イロハが手近なところでサイズの合いそうな服を物色していると、
舌打ちが聖堂に響いた。

「大きすぎる。使えない奴め」

袖を大きく捲った魔女に、ウエストがどうしようもなく合わない
ズボンを投げ返された。

叫び出したくなるのを懸命に堪え、イロハはそれを身につけた。
冷静にと自分に言い聞かせる。

待望の相手が目の前にいるのだ。
しかも敵意を向けられていないのであれば、これほど好都合なこ
とはない。

「学校の奴らを消したのは、あんたか」
「それがどうかしたか」

返ってきたのは、肯定だった。

人間を大量に消失させる術がある。
ならば、次に知るべきことは――

「なぜだっ……!」

だが次の問いを考える前に、イロハはそう叫んでしまっていた。

「――なぜ？ お前、怒ってでもいるのか？」

魔女は理解できないとでも言いたげに、冷ややかに笑う。

「司祭になろうとしている連中なんて、どうでもいいと思っているくせに」

「なっ……！？」

「お前、この＜世界＞が気に入らないんだろう？ 壊したいのだろう？」

頭を殴られたような衝撃――次いで、イロハは胸に軽い圧迫を感じた。

魔女の人差し指がイロハの胸を突いている。

「そういう異物がいれば、他の連中の魂が集まるように術を組んだ」
「集……まる……？」

「ここにいた連中は、お前の中だ」

押しつけられていた指で胸を押され、イロハはたたたらを踏む。

「感謝しろ下僕。数百の魂を得たお前はもう＜世界＞の理に囚われるばかりの＜愚者＞ではない」

魔女の指先がイロハの胸から祭壇へ向けられた。

祭壇の背後――そこには高さ十メートルを超える神の子の像がある。

ある、はずだった。

イロハの全身は震えていた。

そこにいたのは、神の子でもその母でもなかった。

「鬼——……だって？」

額から角を生やし、邪悪な笑みを浮かべる存在は、鬼か悪魔だ。

「俺たちはあれに……祈ってた、のか……？」

気づかなかった。

イロハだけではない。神学生は誰一人として気づいていなかった。皆、何の違和感も抱かず、禍々しい邪神像に祈りを向けていたのだ。

「な、何が、どうなってる……」

「極東の国より這い出た悪魔、といったところか」

魔女の言葉に身の毛がよだつ。

鬼の像もアジサイも、おそらくヤマト由来のものだ。
だとしたら——

「まったく、悪趣味極まりないな」

魔女の侮蔑に呼応するかのように、聖堂が軋んだ。

空気が固まったかのような異様な圧迫感が声を伴って降ってくる。

「ああ、それはよく言われるな」

そう、だとしたら。

ヤマト人を消したのは——ヤマト人なのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4427ba/>

十三番目の秘術

2012年1月15日04時50分発行